

親鸞仏教センター通信

2006.
June

2006年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第18号

自己を開く

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深

昨年(2005年)末、あるテレビ番組で、全盲の日本人ピアニストが、世界で最も難関だといわれる「ショパン国際ピアノコンクール」に挑戦する様子を特集していた。彼の名は辻井伸行くん。現在、東京音楽大学附属高等学校に通う17歳で、世界各国からの参加者のなかで最年少での出場であった。まだあどけなさの残る容貌ではあるが、しかし演奏中の辻井くんは実にすがすがしい顔をしており、彼の奏でる旋律には、不遜も卑下もないありのままの自分が表現されているように感じられた。

最終的に辻井くんは、予備予選・一次予選は通過したものの、残念ながら本選への進出はかなわなかった。しかし、「いまの17歳の僕にできる限りのことを精一杯やるだけ。やるだけのことはやってきたから、もし落ちて悔いはない」という言葉が強く印象に残った。その屈託のない態度は、たしかに天賦の才能と不斷の努力の賜物かもしれない。しかし何よりも、辻井くんは音楽を通して常に自分自身と向き合っているからこそ、たとえ逆境に直面しても自分を見失うことなく、その力を発揮することができたのではないだろうか。

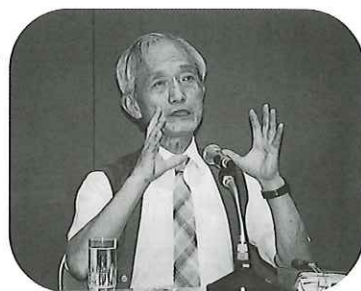
近ごろ、「自分探し」という言葉をあらためて耳にする機会が多い。「熱中できる趣味や自分に合った仕事を見つけたい」「他人にはない、自分にしかない才能を発見したい」、あるいは「自分がいまここに生きている意味や価値を明らかにしたい」等々。その目的や理由はさまざまである。しかし、このように多くの人が「本当の自分」を探し求める背景には、物質的豊かさを享受しながらも、現在の自分や社会の状況に対して、言い知れぬ閉塞感や漠然とした不透明感を感じていることが挙げられよう。

清沢満之は、自己の信念を次のように表白する。「我^{われ}他力の救済を念ずるときは、我^{われ}が世に処するの道^{みち}開け、我他力の救済を忘るときは、我が世に処するの道閉ず」(「他力の救済」自筆原稿)。濁った波がとどまることなく押し寄せる闇黒の世のなかにあっても、人間存在の目覚めをうながして止まない阿弥陀の本願を憶念するとき、自分が真に生きていく道が開かれてくる。しかし、ひとたび自我意識に心を奪われるならば、その歩むべき道は黒闇に覆われ閉ざされてしまう。清沢はこのように述べて、親鸞の他力救済の教えを「処世の完全なる立脚地」として明らかにした。清沢の言葉は、現代の閉塞的状況を打ち破って、自己を切り開いていくための大切な視座を教えているのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土^{じよくそ}—濁世を超えて、濁世に立つ—」 生み出された人が 本願を証明する

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第45回と第46回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第45回は、「莊嚴菩薩功德成就」の第二首について、第46回は、同第三首について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第44回の問題提起からその一部を紹介する。

（越部良一）

■ 人を生み出す本願のはたらき

菩薩功德の初めの言葉は、「安楽国は清浄^{しやうじやう}にして、常に無垢^{むこ}の輪^{りん}を転ず、化仏^{けぶつ}・菩薩の日^{しゆみ}、須弥^{じゆみ}の住持^{じゆうぢ}するがごとし」（『浄土論』『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部）と言います。安楽国は清浄であるのですが、ただ清浄でとどまっているというのではなくて、常に無垢の輪を転ずると。つまり、常に動いている。清浄なる如来の本願が輪の如くに動く。それを「無垢の輪を転ずる」と表現するわけです。

そして、「化仏・菩薩」の「化仏」とは、真仏に対する。浄土の教で真仏と言え、阿弥陀如来であり、それに対して化仏は、阿弥陀如来を証明したり、阿弥陀如来を讃めたりする存在です。そうした存在は、すべて仏の意味をもつ。だから、それは諸仏^{しよぶつ}と言ってもよい。そして、仏に成ろうとする人、それが菩薩であって、菩薩と仏とは因果の位が違うわけですが、ここでは、浄土がはたらいて生み出す人のことを、「化仏・菩薩」という言葉で押さえているのだらうと思います。だからその違いを言うよりも、人を生み出すというはたらきを表現して

いるのだらうと思うのです。

浄土は、空間的に表現される、本願のはたらきをもった場所である。そういうはたらきは抽象的なものではなくて、実は人を生み出している。人において本願がはたらいて、その人が本願を証明する。はたらいている事実を証明するものがなければ、はたらきはないのといっしょです。何かはたらいていることを証明するものがあるから、はたらきがわかる。本願も、本願にふれ、本願を感じて、本願のはたらきがあると思う人間にあるわけです。

■ 法は人によりて重し

仏法には大変大事な言葉があって、『涅槃經』の「四依品」に、「法に依りて人に依らざるべし」（親鸞は『大智度論』から『教行信証』「化身土巻」に引文。『真宗聖典』357頁）と。法に依れと。つまり、人をたよりにすると、真理はどこかで濁る。真理それ自身に依れと。そういう指示がある。人間は、人というものに非常に執着して縛られるところがあるからです。

けれども一方で、曇鸞大師の『浄土論註』で、「なぜ、『浄土論』の初めに婆藪槃頭菩薩造^{ぼすばんずぼさつぞう}と書いてあるのか」ということを註釈して、「人に因て法を重んずる」（『真宗聖教全書』281頁、大八木興文堂）、法は人によりて重しと、こういうふうに言うのです。つまり、法に依れと言っても、法それ自体がどこかにあるわけではない。法は聞いた人にある。聞いて、主体化して、それを生きている人にあるわけです。

文献に書いてあるからといって、そこに法が

あるわけではない。文字は必ずしも法ではない。法は、文字を読んで、法のはたらきをそこから汲み取った場合に、汲み取った人にあるわけでしょう。誰が読んでも法があるかと言えば、法などありはしない。「漢文だからわからない。日本語に直せ」とよく言いますが、日本語に直したらわかるかといったら、わからないのですよ。文献の中身というものは、感じる人間にあって、言葉に直接あるわけではない。言葉が指示する内容を感じ取る人間にあるわけです。もちろん、言葉はその中身を指示していますから、よく読めばあるのだけれども、言葉の表層にあるのではない。だから「義に依りて語に依らざるべし」（『大智度論』『真宗聖典』357頁）という言葉も四依の一つにある。「義」は意味です。語に義があるかといったら、語は義とは限らない。もちろん語を通さなければ、義はないのです。言葉を通して、人間は義をいただくことができる。法と人の関係も、法があればよいといっても、語り伝える人やそれを理解する人がいなければ、法の意味はないのです。

■ 拡大する浄土

安楽国は清浄であって、無数の煩惱の衆生を目当てとしてはたらいていく。そのはたらきを感じられたら、その人が本願を証明し、本願のはたらきを自分の転換において感じて、それを語る。そこに、もう無限に浄土が拡大していく。「浄土が拡大する」というのは、私の師匠の安田理深先生が、晩年に盛んにおっしゃり、拡大する浄土という概念を出されておりました。つまり、新しく、新しく、本願を生きる人が生まれてくる。浄土は無辺際（むへんざい）ですから、本当は区域はない。だから拡大するというのも、人間の感ずる空間的表現です。拡大する浄土という言葉で、はたらく浄土を語ろうとされたわけです。

そういうはたらきをいただくと、人が引き受けるのだけれど、人、個人の固執がどこかで破られる。人がやるのではない、法がはたらくの

です。徹底的に本願がはたらく。『教行信証』を編集したのは、愚禿（ぐどく）釈（しゃく）親鸞（しんらん）ですけれど、すべては、本願のはたらきを語る言葉です。自分の体験を語る言葉などないのです。もっとも全部が自分の体験と言ってもよいのですが、つまり、法のはたらきが主体化されて親鸞聖人の言葉となって語られているのだけれど、個人体験を語っているわけではないのです。

だから「化仏」と言うと、何か化け物みたいなものがどこかにいる、という話ではなくて、あたかもお湯から湯気が沸くように、本願が人を生み出して、いくらでも人が仏という意味をもって現れてくる。こういうことを象徴（しやうせん）しているのだと思うのです。あたかも須弥山（しゆみせん）が世界をたもつが如くに、化仏・菩薩が、お日様が無数にあるが如くに、太陽系が無数にあるが如くに、新しく生まれ、そして新しく生まれた人（仏）の周りに、また人が生まれてくる。そういうイメージです。

文字どおりに、神話的表現として考えるなら、どこか遠くに安楽国という国があって、そこには何か光っている仏さまがたくさんいる、そういう表現です。これは、死んだら往く世界のことを語っているわけではないのです。もちろん死んだら往くかもしれません。でも、それはわからない。誰も証明できない。浄土の教えは、単なるフィクションではないのです。もちろんフィクション、物語の意味もあります。けれど、それを通して、願いを引き受ける人を待っているのだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2006年6月16日（金）午後6時30分～9時

7月28日（金） 同上

8月29日（火） 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

りぬれば、すでに定聚のくらしいにおさめしめた
まいて、命終すれば、もろもろの煩惱悪障を
転じて、無生忍をさとらしめたまうなり。

この悲願ましまさずは、かかるあさましき罪
人、いかでか生死を解脱すべきとおもいて、一
生のあいだもうすところの念仏は、みなことごと
く、如来大悲の恩を報じ徳を謝すとおもうべきな
り。

念仏もうさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜ
ば、すでに、われとつみをけてして、往生せんとは
げむにてこそそうろうなれ。もししからば、一生
のあいだ、おもいとともうこと、みな生死のき
ずなにあらざることをなれば、いのちつきんまで
念仏退転せずして往生すべし。

ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不
思議のことにもあい、また病悩苦痛せめて、正
念に住せずしておわらん。念仏もうすことかた
し。そのあいだのつみは、いかがして滅すべき
や。つみきえざれば、往生はかなうべからざる
か。

攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる
不思議ありて、悪業をおかし、念仏もうさずして
おわるとも、すみやかに往生をとぐべし。

また、念仏のもうされんも、ただいまさとりを
ひらかんずる期のちかづくにしたがいても、いよ
いよ弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこ
そそうらわめ。つみを滅せんとおもわんは、自力
のころにして、臨終正念といひのるひとの本意
なれば、他力の信心なきにてそうろうなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

弄され、罪に無感覚である人間が、どのようにして迷いの眼を翻し
て、真実に目覚めて生きることができようか。そのように受け止めれ
ば、一生の間、称える念仏は、ひとつ残らず、如来大悲の御恩への感謝
の表れであると思われてくるだろう。

念仏を称えるたびごとに、自分の犯した罪を消そうと思うのは、自分
の力で罪を消して、弥陀の浄土へ往生しようと努力することになるので
ある。もしそうであれば、一生の間、ありとあらゆる思いは、すべて
迷いの生活へつなぎ止める鎖となるから、いのちが終わるまで、念仏を
称え続けてはじめて往生が可能であろう。

ただし、人間の生存は、自由意志のままにならない限定性を生きたるも
のであるから、どんな思いがけないことに遭うかも知れず、身心の病
の苦しみ責められ、臨終に心が乱されて、念仏を称えて終わることが
できないかもしれない。その間の罪は、どのようにして消すことができ
ようか。罪が消えなければ、往生は不可能なのか。

われわれを摂め取って捨てない弥陀の本願を信ずれば、どのような不
慮のことにも遭い、罪業を犯し、たとえ念仏を称えずにいのちが終わろ
うとも、本願のはたらきで、直ちに往生を遂げることができるのであ
る。

また、いのちの終りに念仏が称えられたとしても、それは、いまま
に浄土のさとりが開かれるときが近づいて、いよいよ弥陀の大悲を信
じ、救われるご恩への感謝を表すことになるのである。念仏を称えて罪
を消そうと考えるのは、自力の発想であり、臨終に心の乱れをなくして
念仏しようとするひとの本音であるから、そのひとは他力の信心がない
のである。

語 註

- ①「八十億劫の重罪」人間がもっている罪の深さを教えるために、無限の
時間の感覚で表現したものである。
- ②「善知識」善親友ともいふ。仏道に教え導き入れるひと。「有縁の知識」
と同義。「(序)の語註(「親鸞仏教センター通信」創刊号)を参照」
- ③「十惡五逆」「親無量寿経」には、「五逆十惡具諸不善」(「真宗聖典」一
二〇頁)とある。仏が説かれる、さまざまな因縁のなかで悪を犯してしか
生きざるを得ない人間存在の姿。
- ④「定聚のくらしい」正定聚のこと。必ず仏となることを確信した位。
- ⑤「無生忍」ここでは「無上菩提」と理解した。親鸞聖人の用法では、真
の仏弟子の利益として無生忍を押さえておられる。したがって、「現生
正定聚」と同義語である。
- ⑥「業報」(「第七号」の語註(「業報」第九号を参照)。「
- ⑦「正念」一般的には、八正道のなかのひとつ。仏道に叶った正しい想念
の意。ただし親鸞は、称名念仏を「正念」と理解している。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

『anjali』第11号および

『現代と親鸞』第10号を刊行

このたび、情報誌『anjali』第11号(写
真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第10
号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第11号では、小説家の藤原智
美氏、寄生虫学者の藤田紘一郎氏、仁愛大
学学長の園田坦氏、整理回収機構常勤監査
役の重成侃氏、東京大学大学院教授の金森
修氏、聖心会修道女の和田町子氏、消費社
会研究家の三浦展氏、ジャーナリストの稲
垣真澄氏、武蔵野大学教授の田中ケネス氏
など、11人の各専門分野の方々に、現代社
会・現代人の諸課題について、ご執筆いた
だいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第10号では、
研究論文(羽塚高昭研究員・本多雅人嘱託
研究員)のほか、「現代と親鸞の研究會」
から朝鮮史研究会会員の岡百合子氏、「英
訳「教行信証」研究會」から大谷大学教授
の安富信哉氏、「歎異抄」研究會から東京
大学名誉教授の脇本平也氏の講義と質疑。
また、第3回「親鸞仏教センターのつどい」
から理学療法士の三好春樹氏と本多弘之所
長の講演、さらに、「親鸞思想の解明」か
ら本多弘之所長の問題提起(5講座分)を
掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十四条のテーマは「滅罪」である。罪をいかにして滅却するかという人間の発想を問題としていく。

ここに中世の人びとが、どれほど犯してきた罪に敏感であったかということが想像される。戦乱の世であれば、殺人に悩む武士の姿があった。また、農業や漁業や狩猟という第一次産業に携わってきた人びとには殺生への罪悪感があった。

現代人が遠く忘れてきた、ナイーブな感性がそこにはある。生きるということは、罪をつくることなしには成り立たない。しかし、現代人は罪に悩まなくなつたと語るのは早計である。ひと知れず罪にもだえているひとは多い。罪に悩むということがあって、はじめてそこに「救い」が要求されてくるのだ。罪に悶絶する人間に照準を合わせて、罪を恐れるなど愛の言葉を『歎異抄』は発してくる。

（武田定光）

『歎異抄』試訳 第十四条

原文

一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしということ。

この条は、十悪五逆の罪人、日ごろ念仏をもうさずして、命終のとき、はじめて善知識のおしえにて、一念もうせば八十億劫のつみを滅し、十念もうせば、八十億劫の重罪を滅して往生すといえり。

これは、十悪五逆の軽重をしらせんがために、一念十念といえるか、滅罪の利益なり。いまだわれらが信ずるところにおよばず。

そのゆえは、弥陀の光明にてらされまいらするゆえに、一念発起するとき、金剛の信心をたまわ

現代語訳

「南無阿弥陀仏」と、ひと声念仏することによって、八十億劫という果てしない時間に私が犯してきた罪を一気に消滅させることができる、と信じなさいということについて。

平生、念仏を称えることなくして臨終を迎えた十悪五逆の罪人が、生まれて初めてよき師の教えに会い、ひと声称えれば八十億劫の罪を消し、十声称えれば十倍の八百億劫の重罪を消して浄土へ往生することができるといふこの主張は、『観無量寿経』（下々品の経文）を根拠とするものである。

これは、十悪・五逆の罪がどれほど重いかをわれわれに教えるために、一声・十声と表現しているのであらうか。これは、念仏が罪を消すという利益を表している。しかし、いまだわれわれが信ずるところのものではない。

その理由は、阿弥陀の光に照らされて、本願によって生きようという心が湧き起こる。それは金剛のように堅い信心を獲得しているのであるから、すでに正定聚の次元に包摂され、命終したときには、さまざまな煩惱や悪業を転換して、無上菩提を開くことができるのである。この阿弥陀の悲願がなかったならば、私たちのように目先のことに翻

親鸞仏教センターの動き

（2006・3～5）抄出

■2006年

- 3・1 『親鸞仏教センター通信』第17号を発行。
- 3・3 第18回研究会（研究・交流・出版）
- 3・8 第9回英訳「教行信証」グロッサリ研究会公開論議会「いま新たに聞く―法然の世界―」（選訳本願念仏集を読む）①3／8 ②3／15 ③3／22 ④3／29（文京区・東京大学仏教青年会館セミナー室）
- 3・10 親鸞聖人ご命日のつどい
- 3・16 第66回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会
- 3・17 羽塚高昭研究員に博士（文学）が学位授与される。論題「Mindapathiaの成立と初期経典の発達」
- 3・27 第42回清沢満之研究会
- 3・28 第46回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 4・5 第74回英訳「教行信証」研究会「鈴木大拙訳「教行信証」にみられる親鸞思想の理解」龍谷大学教授・デニス・ヒロタ氏（文京区・東京大学教授・デニス・ヒロタ氏）「教行信証」「化身土巻」を読む①4／5 ②4／12 ③4／20 ④4／27（文京区・東京大学仏教青年会館セミナー室）
- 4・14 第4回英訳「教行信証」再版編集会議
- 4・26 第4回「親鸞仏教センターのつどい」（親鸞仏教センター、学生会分館）記念講演「エビデンスと直観―いのちの時代を生きる―」常津三敬病院名誉院長・常津良一氏、「自覚と事実」親鸞仏教センター所長・本多弘之
- 5・5 親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・16 第27回現代と親鸞の研究会「現代における存在の不安と宗教」ドキュメンタリー作家・森達也氏（文京区・東京ガーデンバレー）
- 5・23 第47回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・1 「『聖典』第11号、「現代と親鸞」第10号、「親鸞仏教センター通信」第18号を発行。

— 現代と親鸞の研究会・第19回 —

国家と宗教

— 共同体の光と影をめぐって —

社会学者 橋爪 大三郎



橋爪大三郎 氏

2005年8月22日、東京ガーデンパレスにおいて、社会学者の橋爪大三郎氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。国家と宗教の問題がクローズアップされている現代において、橋爪氏は、国家の定義、さらには国家と宗教との関係を考える原理を明らかにされながら、靖国神社や教育基本法の問題性について言及された。

ここにその一部を紹介する。(本多雅人)

■ 国家とは何か

国家とは、一、税金を取る、二、公共サービスの行なう、三、正統性を主張する、という三つによって定義できると思います。つまり、国家は、税金を取る見返りとして、公的サービスを提供するわけです。税金と公共サービスの関係は、「社会的再配分」といって、豊かな人から多く取って、貧しい人に多く利益が及ぶという機能をそなえています。ここに国家が広く支持される理由があり、それが正統性ということになります。この定義は、宗教や時代とは無関係に、およそ人間が生きている限り必ず存在するメカニズムであろうと思います。ですから、ここでの国家は、宗教と無関係という意味で、世俗的なものです。

■ 国家と宗教

宗教と国家の関係で言えば、宗教がやることは、こういう国家は宗教的目的に合致しているということで、これを宗教によって補強する。

あるいは、国家と宗教とは無関係であるということ、宗教の外側に国家を絶縁して分離してしまう。大きく分けて、この二つの態度があり得るわけです。以上が、国家と宗教の関係を考える場合の原理的な問題であろうと思います。そこで、国家と宗教の関係、特にキリスト教についてお話したいと思います。

キリスト教は、イスラム教とは政治的国家に対する考え方がだいぶ違うと思います。イスラムの人びとは自分で法律を制定し、国家を樹立しますから、イスラム教の原点は政教一致です。キリスト教はさまざまな苦難をとおして、ローマ帝国との関係を築いていくのですが、その根底には、イエス自身がローマ帝国に対して、税金を取る権利を認めているということがあるのです。つまり、世俗的国家をキリスト教は否定していないと言えるわけで、それが「神の意思」であるというように理解できます。こうして、ローマ帝国もキリスト教を認めていきます。

近代に入ると、国家主権は神聖なもので、教会に優越するという学説が主張されていきます。この原理でアメリカ合衆国も樹立されています。アメリカ合衆国は、どんな教会であっても、信仰の自由を守る。アメリカ合衆国が存在する理由は、信仰を守るためです。アメリカ合衆国そのものは、特定の教会に属することはしません。絶対に世俗的国家でなければならぬ。人民はアメリカ合衆国の憲法を守る。アメリカ合衆国は教会の信仰を守る。こういう交換関係が成り立っています。これは、ローマ帝国のときとまったく同じです。アメリカ合衆国の憲法に対する忠誠を、アメリカ国民はみな誓う

わけです。憲法は世俗の契約であり、宗教上の信仰と無関係です。

■ 日本の近代化と靖国問題

次に、日本について少し述べてみたいと思います。日本は、ヨーロッパ近代の伝統とはまったく無関係な社会であるのに、明治維新を境に近代化に成功しました。もちろん、急激な近代化で、現在もさまざまな問題を背負っていますが、憲法体制や資本主義経済をうまく組織して近代国家になったということは、世界史的に注目すべき事例だと思います。

明治近代国家は世俗国家ですから、税金を集めて公共サービスを行ないますが、もう一つには神聖国家のレベルであるので、二重構造になっています。天皇は超法規的、文化的存在であるとなると、国民が応召^{おうしやう}に応じて戦地に行くというのは、超法規的なものの命令に応える神聖な任務になります。ですから、戦死すると英霊になるというのは当然である、ということになります。

後者の論理は戦後に批判され、これを文字どおり戦前と同じように信じるということは、いまはできないわけですが、この二つのレベルの論理が、ごっちゃになっているのが、いまの靖国神社と英霊の問題だと思います。戦前の靖国神社は、国家が神道を管理するという考え方でできていて、宗教に対する国家の優位を強く主張するシステムです。宗教が国家に優越するというのは中世的ですから、このシステムは、国家主権説を日本流に翻案したもので、近代的なものと言えます。戦前は神道の体裁によって、人びとに公民の義務を理解させていたわけです。そういう意味で、国家そのものが教会であった側面があります。

ところが、天皇が人間宣言をして、敗戦を迎えることによって、明治的な神聖国家が崩壊しました。それとともに、近代国家の公共性そのものを理解する枠組みも壊れてしまったのではないのでしょうか。公共性の根拠は、ふつうの人民、ふつうの人びとのなかにあると考えていま

す。いわゆる、ふつうの人が交流することが「公共性」です。私たちは、公共的な団体の一つとして、政治国家を組織します。公共性が復権されれば、公民としての義務を果たすことに対するリスペクト（respect 尊重）が復元されます。そうすれば、靖国神社は戦後社会のなかに位置づいて、神道という問題と切り離されます。靖国問題に対して、公民の義務としてのレベルでは評価するという論理を打ち出せば、問題の解決になるのではないのでしょうか。

「国を愛する」ということには、二つの次元があると思います。「郷土愛」と「政治的国家への忠誠」です。この二つは、全然違うことだと思います。私は、単純に愛国心がいけない、あるいは教育になじまないからと反対しているのではなく、教育基本法のなかに愛国心を謳^{うた}うというのは、この二つをごっちゃにしていることが非常に有害だから反対しているわけです。あらためて個々人と政治国家の関係をとらえ直し、「公共」の新たな概念を確立することが大切であろうと思っています。

（文責：親鸞仏教センター）

※橋爪大三郎氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第11号（12月1日号）に掲載予定です。

橋爪 大三郎（はじづめ だいさぶろう）社会学者
1948年、神奈川県に生まれる。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。執筆活動を経て、現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科・価値システム専攻教授。著書に『仏教の言説戦略』（勁草書房）、『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）、『橋爪大三郎の社会学講義1・2』（夏目書房）、『正義・戦争・国家論』『天皇の戦争責任』（以上、共著、径書房）、『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）、『政治の教室』『アメリカの行動原理』（以上、PHP 新書）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

■ 鈴木大拙先生翻訳の英訳『教行信証』再版事業の進捗状況について

親鸞仏教センターでは、来る2011年に迎える親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として、世界的な仏教者であり、大谷大学名誉教授であった鈴木大拙先生翻訳（1961年）の英訳『教行信証』の再版事業を進めています。

この英訳『教行信証』の翻訳事業は、1956年5月、当時、真宗大谷派宗務総長の宮谷法合氏が、宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌を迎えるにあたって、親鸞聖人の教えを世界の人びとに発信したいという切なる願いをもって、当時、コロニア大学客員教授の鈴木先生に懇望し、始められたものでした。

鈴木先生は90歳というご高齢にもかかわらず、「教巻」「行巻」「信巻」「証巻」の翻訳を次々に仕上げられました。その後、推敲を重ねられつつあるなか、1966年に鈴木先生はご急逝され、その後は、鈴木先生が大谷大学内に設立された東方仏教徒協会の西谷啓治先生を編集代表に、1973年6月、親鸞聖人御誕生八百年・立教開宗七百五十年記念として、真宗大谷派から英訳『教行信証』が刊行されました。

現在、英訳『教行信証』が入手できない状況のなか、前田専學氏（東京大学名誉教授、前日本印度学仏教学会理事長、親鸞仏教センター客員研究員）を中心に、グロッサリ（語彙）等の検討を加えながら、2008年に刊行すべく再版事業に取り組んでいます（写真）。このたびの再版により、多くの方々が英訳『教行信証』を手にすることが可能になります。親鸞聖人の教えが全世界に広まらんことを切に願うものです。



■ 「鈴木大拙没後四十年記念展」開催のご案内

鈴木大拙先生が還浄されて40年を数える今年、宗祖の七百五十回御遠忌記念の関連事業として、先生にゆかりの深い鎌倉、金沢、京都の三市において、来る6月8日～11月28日にかけて、「鈴木大拙没後四十年記念展」（主催：鈴木大拙没後四十年記念展実行委員会〈松ヶ岡文庫・鎌倉国宝館・金沢市立ふるさと偉人館・大谷大学博物館・真宗大谷派〉、後援：NHK・朝日新聞社・岩波書店・春秋社）が巡回展示されます。

この記念展では、禅、念仏の教えを实践され、仏教の思想・文化の普及にご尽瘁された鈴木先生の96年のご生涯を、著書や原稿、墨蹟や写真、遺品などにふれていただくことによって、躍如とした先生にお会いいただければ幸いです。

英訳『教行信証』関連の展示品には、宮谷法合宗務総長に手渡された英訳『教行信証』の草稿（写真：左が鈴木先生）、「信巻」の手書き原稿、還浄されるまで推敲されたといわれる序文、アメリカで実際に手にとって見られた和綴本『教行信証』等が予定されています。

特に、京都会場では、大谷大学博物館における開催期間（10月10日～11月28日）と、東本願寺において厳修の御正忌報恩講（11月21日～28日）とが重なるため、東本願寺のご参詣に合わせ、ぜひご覧ください。なお、巡回展の一般公開に先立ち、6月7日には、鎌倉国宝館においてオープニングセレモニーが催されます。



■ 鎌倉会場：鎌倉国宝館

テーマ：「円覚・東慶・松ヶ岡の至宝」

期 間：2006年6月8日(木)～7月23日(日)

会 場：鎌倉市雪ノ下2-1-1

※開館日時・入館料等のお問合せは、鎌倉国宝館（TEL 0467-22-0753）まで。

■ 金沢会場：金沢市立ふるさと偉人館

テーマ：「大拙と金沢」

期 間：2006年8月3日(木)～9月30日(土)

会 場：金沢市下本多町6-18-4

※開館日時・入館料等のお問合せは、金沢市立ふるさと偉人館（TEL 076-220-2474）まで。

■ 京都會場：大谷大学博物館

テーマ：「大拙 その人と学問」

期 間：2006年10月10日(火)～11月28日(火)

会 場：京都市北区小山上総町 大谷大学内

※開館日時・入館料等のお問合せは、大谷大学博物館（TEL 075-411-8483）まで。

■ あ と が き

「実にこの世においては、怨（うら）みを以（もつ）てしたならば、ついに怨みの息（や）むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」（『ダンマパダ（法句経〈ほくきょう〉）』—中村元訳『真理のことば』岩波文庫）。この言葉は、親鸞仏教センターが本年2月より、東京大学仏教青年会館（文京区本郷）を会場に、「いま新たに聞く—釈尊・法然・親鸞の世界—」を掲げ、研究員主宰の公開輪読会を開催してきたなかで取り上げられた偈（げ）の一節である▼第二次大戦後の1951年9月、サンフランシスコ講和条約が結ばれたとき、セイロン（現スリランカ）政府代表団々長のJ. R. ジャワラデネ氏が、演説でこの一節を取り上げられたことは有名である▼日本は戦時中、イギリスの基地があったセイロンに対して、多くの被害を与えた。氏は、「セイロンにおけるわれわれは、幸い侵略を受けなかったが、空襲による損害、大軍の駐屯による損害、天然ゴムの枯渇の樹液採取による損害は、損害賠償を要求する資格をわが国に与えるものであった。しかし、わが国はそうしようとは思わない。なぜなら、われわれはブッダのことばを信じているからだ」と。そして、「ブッダの『憎しみは憎しみによってやまず、ただ愛によってのみやむ』という言葉は、アジア

の数え切れないほどの人びとの生涯（生活）を高尚にした」と、この一節を引用し、「日本に対して怨みがないわけではない。しかし、数百年の間、共通の文化と伝統でお互いを結びつけたのであり、この共通文化は未だに存続している。だから、仏教徒として怨みをかえすことはしない、日本には賠償権を放棄する」（趣意・インターネット「スリランカ大使館〈東京〉」資料から）と述べた▼まさに、2400年前のブッダの眼が、現代を見る最も新しい視座を与えてくれている。作家の高史明氏が『anjali』第2号で指摘された「今、起きてるさまざまな問題をどう受け止めるのか。受け止める視点はどこにあるのか。このことを抜きに仏教を語るといことがあっては、生きた人間の生きざまのところで仏（ほとけ）のはたらきが、どうはらたいっているのが見えなくなる」との言葉に、あらためて静かに、よくよく耳を傾けねばならないときであると思う。（長谷岡）

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 今との出会い —